

# 二十五年ぶりの教育実習

—イギリス公立幼稚園保育参加顛末(5)—

豊田 一秀

はじめに

前回、私は自分の体験からイギリスの保育者が、幼児に「応える」事よりは、どちらかと言えば「与える」事に関心を置いた保育を行っている点について述べた。そして、その理由を探るべく、イギリス版教育要領とも言える『幼児の学びへ向けての望ましいねら

3』(DESIRABLE OUTCOME FOR CHILDREN'S LEARNING)の内容について説明した。注1さらに、それが日本の『教育要領』に比べて、(1)大人の計画した事項を直接的に学ばせようとする姿勢が見られる事。(2)各項目の内容が具体的であり、且つ知育的な発達を求める姿勢が直截に出ている事を指摘した。

このイギリス版教育要領を日本のそれと比較して、

どちらがより優れているのかという議論をするのは余りに短絡的であろう。教育というものは国家の歴史、文化の中でゆっくりと形成され、また変化してゆくもので、その時点における国家の情勢や、社会の要請に密接に関係しているからである。今回は、このような成文を産んだイギリスの教育の背景について簡単に見過してみる事から筆を起こしてみたい。

### イギリスのナショナルカリキュラム

まず初めに、日本の学習指導要領にあたるイギリスのナショナルカリキュラムについて概観してみよう。日本では公立、私立に関わらず、文部省の学習指導要領に沿って授業が行われる事はいわば歴史的に自明性を持つ事である。しかし、イギリスにおいてこれが制定されたのは、今からわずかに十年前の一九八八年の事であるという事実は特記しておく必要がある。しかも、未だに私立の学校はこのナショナルカリキュラム

に拘束される事はない。イギリスに於いて、教育は私的な事項として考えられてきた歴史がある。そのイギリスが国家統一カリキュラムを持つに至ったのは色々な理由があるが、その中でも子ども達の学力の低下という問題が最も大きな理由であった。<sup>注2</sup>

さて、イギリスの義務教育は五歳から十六歳までである。因みに、イギリスにおいて五歳からの義務教育が制定されたのは一八七〇年である。しかし、イギリスには既にこの時から五歳以下の幼児を小学校に収容しなくてはならない事情があった。というのは、そのようにしないと弟妹の子守りをしていた幼児が学校に來られないからである。イギリスにも「おしん」的な時代があったのである。この伝統は今日でも残っていて、五歳以下の幼児（主に四歳児、時には三歳児も含む）を収容するレセプションクラスとして小学校の中に存在している。このように幼児教育が小学校教育と密接な関係、揶揄して言えば小学校の「おまけ」的な

位置に甘んじてきたと言う歴史がイギリスにはある。こうした前提の中、前回、説明した『幼児の学びへ向けての望ましいねらい』が、ナショナルカリキュラムを下に降ろしたような形の、即ち、小学校教育に備える事を念頭に置いた形になったのもある意味で当然の結果と言えよう。さらに、一九九七年に政権を樹立したブレア氏率いる労働党が、総ての四歳児にも教育の機会を保障すると公約した事もあって、近年、政府はこのレセプションクラスの充実に向けて予算を投入し始めた。これを四歳からの義務教育化に向けての実質的な第一歩と考える事も可能であろう。三歳から四歳の子どもを保育している幼稚園（ナースリースクール）は公立、私立を問わず戦々恐々である。

### イギリスの育児風土と保育

第二に、上記の内容を持つ『幼児の学びへ向けての望ましいねらい』が産まれ得る背景として、保育者と

幼児の比率が挙げられよう。私が保育に参加しているクラスの例では、幼児二十三名に対して保育者は四名である（その内二名は非常勤）。イギリスでは、教育は私的な事柄と考えられて来たと同時に個人的な事柄でもあるのである。このような比率の中では、個々の幼児に対してきめの細かい指導をする事が可能となる。文学や数の指導などは、時に教師が一对一で教える様子も見られる。換言すれば、保育者の計画や意図が遂行されやすいとも言えるであろう。残念ながら、保育者の意図が実現されやすいと言う事が、そのまま幼児の意図が保育の中で実現されやすい事につながる訳ではない。私の目から見ると、保育者は保育計画を直截に幼児に提示する傾向が見られる。そして、幼児は保育者の要求に合わせているような雰囲気を感じられる。全体の空気として、保育者の権威が保たれている印象である。この、大人の権威が保たれているという点は幼稚園のみに顕在する事ではなく、広くイギリ

スの家庭にも見られる伝統的な一つの「大人と子どもの型」として捉えるべきであろう。

(一九九八年度の保育学会において、私は「複数の教師によるクラス運営の功罪について」という表題の下、イギリスの保育の特徴を述べると共に、日本のそれとの比較を試みた。その中で、日本の保育が母子愛着関係をモデルとした「愛着型保育」であるのに対して、イギリスの保育は羊飼いと羊の関係をモデルとした「羊飼いい型保育」と言えるのではないかと述べた。保育者の権威が強く、また「与えよう」とする傾向が強い事も「羊飼いい型保育」の一つの特徴である。詳しくは拙稿を御参照頂きたい)

### 柔軟なイギリスの保育者と、クラス運営の独自性

イギリスの保育室で受けた感想を基に、その奥に存在する制度と保育風土について簡単に述べてきたわけだが、そろそろ話題を現場に戻してみたい。本文の冒

頭に挙げたような二つの傾向を持つイギリスの「保育のねらい」であるが、これが総ての現場の保育者に歓迎されているわけではない。ある日、保育室に用意された算数的な事柄を教えるコーナーに子どもが一人も来ないのを私が冷やかしかつ気味に担任に指摘すると、「こんな子ども達にとって面白くなんかないわよ!」と、やや自嘲気味に答えるH先生であった。どこにも「子ども派」の先生はいるものである。しかし、制度的な要求が強まる中、現場の先生達が息苦しさを持っている事も事実のようである。

そのような中、先生たちの自発性に基づいた小さな変化が起こった。そのきっかけは私が先生達に見せた日本の保育ビデオである。こちらでお世話になっている先生達から、日本の幼稚園の保育に関して説明して欲しいと言われた私は、丁度、手元にあった文部省選定、岩波映画作製の『きょう、きてよかったね! サトシのこだわりと自分さがし』を見せる事にした。この

ビデオが、偶然、私の勤務していた幼稚園を舞台としていたので、私にとって説明しやすかったのである。長期間「ミニ四駆あそび」ばかりする主人公のサトシに対して、イギリスの先生たちの第一声は、自分の興味を持った遊びをこれほど長い期間続ける事が出来るのは大したモノだ、というものであった。そして、先生たちは活動の「片寄り」に心配しつつも、担任がその遊びを無理に他の方向へ向けさせようとしていない点に感心していた。子どもが自分で選び取った遊びは長く続き、自らの遊びの中に遊びを発展させて行く力を秘めている事など話し合った。

そのような事があったのち幼稚園に行ってみると、今までであった十時過ぎの集まりがなくなっている。以前は、この時間に一度子ども達を保育室に集めて、本を読んだり果物を食べたりしていたのだが……。先生に聞いてみると、子ども達に出来るだけ区切りのない長い自由な時間を与える事が、子どもが深く遊ぶため



▲お母さんを思い出して、悲しくなってしまった子を抱っこする先生。隣の子が「わたしも、だっこ！」

に大切なのではないかと話し合ったとの事。ビデオが  
良い刺激になったと話してくれた。そして、もう一つ  
面白いと思った事は、そのようにタイムテーブルを変  
えたのは、最初はひとクラスだけだった事である。後  
に他のクラスもそのように変化させたようだが、いず  
れにしてもクラスを担当する先生たちの考えが尊重さ  
れていて、担任が工夫出来る余地が多く残されている  
のである。管理的な色彩の強い幼稚園に勤めている保  
育者には羨ましい事だろうと感じた。

子どもの遊びを育てる為に、自由な時間を彼らに与  
える事が非常に大切な事であるという点について、多  
くの保育者や母親に異存はないと思う。しかし、時間  
さえ与えておけば子どもが良い形で遊び始めるかと言  
えば、事はそれ程簡単な問題でもない。そこに、子ど  
もの存在を守り、遊びを支え、遊びに応えようとする  
大人の存在が重要な意味を持つてくる。子どもの何に  
どのように応える事が、子どもの遊びを支えた事にな

るのだろうか。これは深い問題である。子どもに「時  
間」を与えたイギリスの先生達と、次にはこんな事に  
ついて話し合ってみたい。

(ローハンプトン インスティテュート ロンドン)

客員研究員)

注

1 この成文は一九九六年に保守党政権によって作られたも  
ので、イングランドとウェールズに適用される。しかし、  
スコットランドは独自の教育制度を持つために、この成文  
には拘束される事はない。なお、一九九八年十一月現在の  
情報として、この成文は労働党政権によって近々、一新、  
あるいは修正されるという事である。

2 近年のイギリスの学校教育の変化については「変わり行  
くイギリスの学校」(清水宏吉著、東洋館出版社)に詳し  
く書かれている。

☆ このシリーズは今回で終わります。